

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月25日現在

機関番号：33918

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720330

研究課題名（和文） 開発援助のフィールドワークにおける介入性に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Effects of Fieldwork as Intervention in Development

研究代表者

小國 和子（OGUNI KAZUKO）

日本福祉大学・国際福祉開発学部・准教授

研究者番号：20513568

研究成果の概要（和文）：本研究では、文化人類学的調査の過程であるフィールドワークに焦点をあて、人類学実践から開発援助への寄与の可能性を検討することを狙いとする。このため、「場」を鍵概念として、調査者を含む様々な出会いや相互作用が生じるさまを観察対象とした。事例群の考察を通して、調査者の「人々の現実に取り添う」姿勢や視点、問いのありかたが、援助現場において特徴的なコミットメントとしてみえてきた。このようなフィールドワーカーのその場へのかかわりは、相互作用的な実践スキルとして、人々を分野別の問題対象と見がちな制度的支援現場において意義を有するのではないかと結論づけられた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to elucidate how anthropological practice can contribute to the betterment of development assistance, while focusing on the process of fieldwork. To this end, the concept of “*ba* (social space)” is considered as a key for observing the process of social encounters, and the interaction among various actors in the field, including fieldworkers. Based on examples, the author establishes that the characteristics of fieldworkers’ attitude towards “walking along with people’s realities”, as well as their views and questions, represent a specific commitment to the field. The author concludes that the engagement of this type of field worker with his or her “*ba*” has significance as a form of interactive skill for use within institutional development projects, where there is a tendency to treat people’s problems as “sectoral”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：開発人類学・国際協力・フィールドワーク

1. 研究開始当初の背景
(1)文化人類学およびその知識の社会的活用

可能性に関する議論と関心が高まっていた。中心的な知的貢献として想定されてき

たのは「書かれた文書」としての民族誌である。しかし長期にわたる参与観察の上まとめられる民族誌は、短期間で進行する援助事業の直接的な改善に直結し難く、また書かれた民族誌の専門的表現は、実務家の読者にとって敷居の高いものとなっていた。

このような状況を受けて、書かれた「成果物」としての民族誌を通じた社会還元以外の可能性として、「書くことに帰結しない人類学実践」(関根 2007)*1 も議論されるようになった。本研究代表者は、これを踏まえ、長期観察によって短期的な開発援助を相対化していく「開発現象のエスノグラフィ」と、調査過程自体に目を向けていく「開発実践のフィールドワーク」の二つの観点を検討してきた(小國 2008)*2。

- (2) 国際協力における農村開発援助では、対象社会と住民が主体となる参加型開発が推進される中で、ファシリテーションに代表されるように、「答え」を外から持ち込むのではなくローカルな主体に寄り添うような援助アプローチの必要性が広く認識され、模索されるようになった。

この流れの中で、ローカルな社会、文化の専門家としての文化人類学に対して援助機関からの期待は高まってきた。しかしながら、上記(1)に挙げた民族誌の性質等の課題に直面し、文化人類学者と国際協力実務者との協働機会が順調に増えているとは言えない状況にあった。

以上(1)(2)の背景を踏まえて、民族誌作成の手段とされてきたフィールドワーク過程自体を社会への働きかけとして捉え、意味を検討する、という研究動機をもつにいたった。

注釈：

*1：関根久雄(2007)「対話するフィールド・協働するフィールド」『文化人類学』72 巻 3号、361-382。

*2：小國和子(2008)「開発実践のフィールドワーク」、『国際開発研究』17 巻 2号、9-22。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下2点である。

- (1) 国際協力におけるファシリテーションの質向上に向けて、人類学的フィールドワークの構成要素から具体的な提言を導く。
- (2) 人類学者の「観察者」という位置づけに検討を加え、開発における人類学実践の一つの可能性として「開発フィールドワーク」を提示する。

3. 研究の方法

以下4点を通じて研究を進めた。

- (1) ファシリテーションとフィールドワーク方法論に関する先行文献の整理
- (2) 事例調査(インドネシア共和国南スラウェシ州農村および行政、援助機関関係者)とその分析
- (3) 開発ファシリテーション&フィールドワーク勉強会をはじめとする研究会開催とそこでの議論を通じたキー概念の整理と、比較事例情報の収集
- (4) 学会を通じた進捗および成果の発信。特に、開発実務と文化人類学双方に向けた発信により、双方の距離を縮め、具体的な協働に向けた議論の場を増やすことを目指す

4. 研究成果

(1) 主な成果

① 場に誘われ、寄り添うという「技術」

調査としてのフィールドワークを、単なるデータ収集をはじめとするフィールドワーカーのアクションとして一人称的に捉えるのではなく、フィールドワーカーを含む相互作用プロセスとして捉えなおすために、「場(social space)」の概念に着目し、考察を行った。

また、本研究で対象とする開発現場とは、保健・医療・教育・農業あるいは経済的な側面など特定の観点から対象社会や人々を「問題状況にある」ことによって支援サービスを提供する、制度的な支援の現場である点に着目し、これらのアプローチでは、2つの点で危うさがあることを指摘した。一つ目は日常生活において人々の生活の要素がいかに相互作用的に関連しているかを無視したサービスの提供となってしまう危険性があること、二つ目は、そもそも対象社会が「問題を有する、支援を受けるに値する」とみなすことによって、支援一被支援の力関係を生じさせ、かつそれが固定的な関係であるように認識しがちである、という点である。

このような制度的支援現場においては、対象社会の学び手となり、可能な限り相手の主観に近づいて理解すること自体を目的とする人類学的フィールドワーカーは、その場において固定化されがちな支援一被支援関係を揺らがせ、その場で各自が担う役割に柔軟性を確保し、相互作用性を高めていく要素をもつアクターとして捉えられる。

このことにより、「場に誘われ、寄り添う」ように対象社会にかかわるフィールドワークの姿勢と視点は、開発援助ファシリテーションにとって有用であると結論付けた。

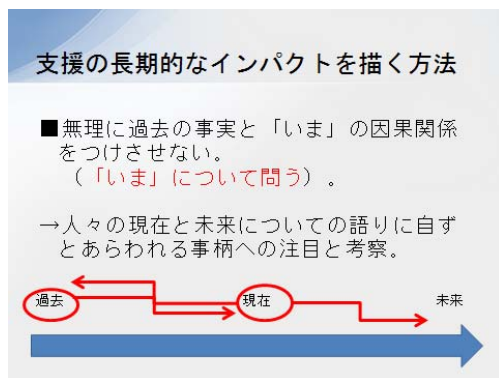
② 短期的展開と長期的展望の組み合わせ

【長期にわたって再訪するフィールドワーカーというアクターが人々の意識や行動に

【与える影響】

インドネシア南スラウェシでは2か所で異なるタイプの調査を事例に取り上げた。ひとつは10年にわたって長期的に再訪を続けるバルー県農村で、かつて日本政府の技術協力事業に参画した現地行政官や対象地域の農家にとって、「来年も来るだろう」と確信的に期待されるフィールドワーカーの存在が、それらの人々が継続的に関連する事業活動に携わり続ける政治的根拠や、発展施行精神的動機付けに影響していたことが考察された。

また、下図のように、このように長期的なインパクトを描く際の聞き取りにおいては、常に「いま」から問うことで、無理に過去の援助事業の事実と現在の生活を結び付けさせないといった特徴的な留意点があることを指摘した。

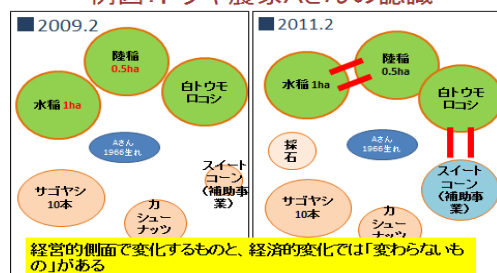


【学際的な短期調査における「民族誌的知識の活用」の可能性の検討】

他方で南東スラウェシの農村調査事例では、必ずしも長期的なフィールドワークの基盤がない学際的なチームでの調査における文化人類学的アプローチの効用の具体的な方法を探った。

伝統的なトラキ住民と南スラウェシからの移住民であるブギス住民が混住する対象村落における近代的農業普及の受容に果たした社会的要因を探る調査では、農学的な観点から行われる生産量など定量的な調査専門家との協働を行った。定量的なデータと別の観点からの考察視点が示されるといった学際調査の強みを生かし、客観的な観点をいったん脇において対象者の認識を聞き取る図の方法（例図参照）を試みた。

例図：トラキ農家Aさんの認識



上記図のように描画をもとに主観を尋ねる調査を隔年で行ったところ、定量的な増減や市場価値とは異なる、文化的な価値に基づく人々の判断基準が顕在化してきた。このような学際的アプローチによる短期調査の実現は、「長期調査を通じた厚い記述」とは異なる民族誌的知識の活用可能性の一例といえよう。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究は人類学的知と開発実践をつなぐ試みの一環であることから、初年度から国内では定期的に国際開発学会での発表を行い、進捗を発信してきた。また意識的に、日本文化人類学会と国際開発学会双方での発信を行った。

くわえて下記の出版実績①（日本福祉大学アジア福祉社会開発研究センター事業成果でもある）は、フィールドワークの営みを実践の場に置きなおしたときの意義や可能性を、開発支援事業の狭義の場だけでなく、地域福祉等さまざまな制度的支援の場を想定して捉えなおし、概念装置としてのアクターアプローチと結びつけて解説したものであり、今後、地域福祉研究者や福祉現場の実務者との協働を進めていく架け橋となることも射程に置いて執筆したものである。

これらを通じて、人類学的知の社会活用において、生産物としての民族誌による還元だけでなく、フィールドワーク過程を実践的に議論する場の醸成を試みてきた。国外に向けての発信は未だ実現できていないが、今後、おもに現地研究者との協働を通じた発信の可能性などを探っていきたい。

(3) 今後の展望

当初想定していた「開発フィールドワーク」の検討結果として『支援のフィールドワーク』が出版された。今後は、現在までの成果を踏まえ、①農村開発など本研究代表者がこれまで取り扱ってきた特定分野事例の比較検討を通じて、本研究で示されたいくつかの萌芽的な具体的な調査の作法を、より実践的なものとして検討を加え、積極的に実務への還元を行っていききたい、また同時に、②地域福祉などより広義の制度的支援現場を射程に入れて、フィールドワーク過程のインタラクションに着目した理論的精緻化を、共同研究の場などを通じて行っていききたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計4件）

① 小國和子「顔の見えるストーリーを活か

- す：トラキ／ブギス混住農村における共同調査の事例より」国際開発学会、2011年11月26日、名古屋大学（愛知）
- ② 小國和子「支援事業を日常的実践に近づける：カンボジアにおける農村開発現場の事例から」日本文化人類学会、2011年6月12日、法政大学（東京）
 - ③ 小國和子「農村開発支援のフィールドワーカー長期的視点から支援のインパクトを描くー」国際開発学会、2010年12月5日、早稲田大学（東京）
 - ④ 小國和子 「開発実践のフィールドワーク」国際開発学会、2009年6月5日、日本大学（神奈川）

〔図書〕（計4件）

- ① 小國和子「アクターとしての調査実践一場に誘われ、寄り添う」穂坂光彦・平野隆之・吉村輝彦（編）『福祉社会の開発：場の形成と支援ワーク（仮題）』、ミネルヴァ書房、2012年10月出版予定。
- ② 小國和子・亀井伸孝・飯嶋秀治（編）、『支援のフィールドワーク 開発と福祉の現場から』世界思想社 2011.06 P253。
- ③ 小國和子「開発現象のフィールドワーク」、日本文化人類学会監修、鏡味治也・関根康正・橋本和也・森山工（編）『フィールドワーカーズ・ハンドブック』、世界思想社、2011.5 pp223-243。
- ④ 小國和子「開発援助実践のフィールドワーク」、佐藤寛・藤掛洋子（編）『開発援助と人類学～冷戦・蜜月・パートナーシップ』、明石書店、2011.5 pp128-153。

〔その他〕

研究会の開催（開発ファシリテーション&フィールドワーク勉強会。同研究会では詳細な議事録を蓄積し、メンバー間の共有知として配信してきた）

<https://sites.google.com/site/ogunikazuko/home/fafid/backnumber>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小國 和子 (OGUNI KAZUKO)

日本福祉大学・国際福祉開発学部・准教授